遺跡の環境整備に関する実証的研究 I

—— 大阪府百済寺跡の公園計画と住民意識 ——

近 藤 公 夫

A Practical Study on an arrangement of historic spot 1
—— The planning of Historic Park "Kudaradera old
Temple" and Interview survey on surrounding inhabit-
ants' feelings ——

By Kimio KONDO

序言

大阪枝方市にある百済寺遺跡は聖武天皇により河内守に任じられた百済王敏福が、8世紀の後半に氏寺として交野郡中宮郷に建立した葉師寺型伽藍様式の寺院の遺構である。

同寺は平安中期に火災にあつてからは衰え現在は百済王神社を遺すのみであるが、我が国に例のない新羅威恩寺式の遺跡は地上と地下に残る70余礎石を今に伝え、大阪府下で大阪城とならぶ特別史跡に指定されている。

筆者はこの史跡の環境整備に基本計画を依頼されたが、その後施工は奈良文化財研究所による実施計画のもとに第1、第2期の計画を終り、遺跡部分は完成段階を迎え、近畿圏の衛星都市である枚方市の特殊な環境緑地としてこの寺跡は定着しつつある。

この論文は、現代における民族の生活環境に対する保全と開発の問題につき、我が国に最初の例といわれるこの史跡教養公園の計画と、それが半成の段階で周辺生活圏の環境に与える影響に考察を加えるものである。

いうまでもなく、環境要因としての遺跡に対する保存と開発という問題は、自然保護に関する同様の問題にあつても知られるように解決が困難であるばかりでなく、考え方自体にも議論の余地が多い。

したがって、この発表にあつてもそれを思弁的に解明することが困難なこと、特に与えられる頁数による限界、を考え説明を計画意匠と遺跡整備による影響にしばつた。

これはかかる問題の計画や影響にあらわれる諸相の実態を紹介し検討して遺跡環境に対する保存開発の理念が更に思索される手懸りを与えよう、というものである。

終りに、史跡緑地の質問調査に大きい御協力を頂いた枚方市局に謝意を表したい。

百済寺跡公園の計画

「設計理念について」

計画とはひとつの主張を意味する。

百済寺跡公園の計画にあつては遺跡に対する態度の決定が要求され、文部省文化財保護委員会、奈良文化財研究所、大阪市立大学建築学教室の有志による意見の交換が持たれた。

大局から見れば、ヒーマニズム至上の主張される現代、計画とは何等かの生活的意義もつことによつて評価されよう。

これは保存、開発の対立といわれる問題などよりも高次の問題であり、ドクシアデイス博士の言葉を借りればヒューマンハビネスを究極の目標とする人類の営みの対象として空間を理解することによる結論である。 1)

この人類の幸福という目標が達成される重要な過程として、我々は生活の充実という意識を無視できない。

そしてこのためには生活行動の圏域において、生活をリクリエートする契機となる休養資源を持つ必要があり、この資源は日常的な心身のリラックスを目的とする事例から、非日常的なレクリエーション機能のものまで多様なものが考えられる。

例えば、人口数百人の近隣圏では近隣の人々が集集し談話する広場がそれとなり、人口数万人の生活圏では日常生活につながつて人々が運動し静養し催しを持つ公園がそれであると言えよう。 2)

更に人口数百万人の生活圏を想定すれば、静的教養的心理的なレクリエーションと動的な肉体的なそれとの場は次第に分離して、前者には博物館美術館園地などを、後者には自然の風景地などを、日帰り圏から更にその圏外に及んで考え得る。 3)

かかる休養の媒介となる資源を計画の対象とする場合計画のとるべき態度はそれのもつ生活的意義が多くの観点から多元的に評価されざるを得ない事実を認識し、その共存を可能ならしめる方向が求められよう。

休養の場の開発を想定する以上の考えは、生活の場の計画に共通した態度である。

そこでは数者択一という態度でなく、その機能の共存こそ基本的な計画理念とされねばならない。

空間に両立の可能性が見失なわれて取捨のやむなきに至ることは計画技術の能力の問題であつて、人類の生活

遺構名	間口×奥行×基盤高(延長)	アンツーカー舗装	植栽
南門	12.0 9.0 0.5(単位m)	10.2×6.0(同左)	チャジンチョウゲ 約400株
中門	12.0 9.0 0.5	10.1×5.4	チャジンチョウゲ 同上
東門	12.0 7.5 0.5	9.0×5.4	チャジンチョウゲ 約350株
大垣	(巾員)3.6 0.3 (160.0)		カモメモチ 約700本
回廊	(巾員)7.5 0.3 (200.0)	巾員 3.3	チャクチナシ 約5,500株
東塔	12.0 12.0 0.7	5.6×5.6	チャドウダンツツジ約800株
西塔	12.0 12.0 0.7	5.7×5.7	チャドウダンツツジ同上
金堂	28.5 18.6 0.5	21.0×12.0	チャサツキ 約3,000株
講堂	26.1 15.0 0.5	21.0×12.0	チャクチナシ 約1,000株
東院	15.0 11.6 0.3		チャハクチョウゲ 約400株
食堂	21.5 12.3 0.5	15.0×7.8	チャハクチョウゲ 約700株

表1 百済寺遺構の造成仕様

図1 百済寺跡公園全景(昭和41年夏)

図2 百済寺跡公園模型(昭和40年冬)

図3 百済寺跡公園金堂附近(昭和41年夏)

空間を営むことに責任を持つ計画者は、生活の意義に内在する多元性を否定することを許されない。

この共存の計画理念はひとつの帰結として保存と開発を総合するものとしての保全という概念をうみ、そこでは効用の総和を最大ならしめるという考えを以て計画の解決をみちびく技術的態度が結論される。

これを、問題の今日的解決と保存至上の主張の間に見られる対立の弁証法的発展であるとしても、失当の言葉ではないであろう。

「基本的計画について」

公園基本計画は本史跡を遺構の明確化により史跡教学の園地とすることに主目的をおき、ここに与えられる緑の環境に静養中心の休養園地を併せて開発し、大衆の利用を通じ、民族的な精神生活に寄与する意図を持つ。

この教学と休養の機能は各々広域と近隣的生活圏に対応するものであるが、それ等は有機的に結合されるべく考慮された。4)

百済寺跡公園において前者の目的は東門または百済王神社から始まり、回廊、東西塔、金堂、講堂、食堂と構成される遺構の再造成、全敷地の造園的復元、により達成されようとした。

このため、各遺構は表1のような盛土と植栽によつて花木園風に表現された。

また、回廊に囲まれる広場は園内の遊歩道と共に細砂利敷として、ハギ坪や塔跡を点景とする沈床園を構成することともなる。

この遺構盛土の土工量は約2百 m^3 で、これは排水路等の切取施工による土量を転用した。

また遺構植栽に要した樹木は低木約1.4万株と中木約0.3万で、その半数近くはチャ苗とし、また0.2万株前後のクチナシとサツキを用い、その他ジンチョウゲ、ハクチョウゲ、ドウダンツツジ等を各遺構に応じて植栽した。

このうち、チャ苗は各花木群植の境栽として考えたのであるが、植栽期がおくれた関係もあつて、20%前後の枯損を来とし、今後、何等かの補植が必要と考えられている。

なお、この遺跡地の公園化以前は雑草やササ類の密生したマツ林であつて、施工に当つては雑草類を除去し、遺跡を破損する危惧のある上木、主としてマツ、も原則的に移植された。

また遺構の築造には、全て現存する礎石や基礎の類を

図4 百済寺公園計画
平面図

- 1 金堂遺構 きつき植栽
- 2 講堂遺構 じんちようげ植栽・くちなし植栽
- 3 食堂・東院遺構 はくちようげ植栽
- 4 東塔・西塔遺構 どうだんつつじ植栽
- 5 南門・中門・東門遺構 じんちようげ植栽
- 6 回廊遺構 くちなし植栽
- 7 大垣遺構 かなめも植栽
- 8 史跡広場
- 9 休養広場
- 10 駐車場
- 11 苑路・歩道
- 12 大刈込斜面 あらかし等植栽
- 13 百済王神社
- 14 百済王神社広場
- 15 便 所
- 16 公園センター予定地

保護して上に盛土し、この盛土造型によつて遺構の規模などを表現したが、これは地形によつて遺構基礎の、植栽や地表処理により遺構の建築の各規模を示す方針による。

この地表処理について本計画で特色とするのは化粧アンツカ、延約0.1 ha、を用いたことで、実施設計段階でその仕様を決定したのであるが、実際にはやや軟弱、特に婦人靴の踏圧で損傷をうけやすい結果となつた。

この問題は金堂前庭の細砂利広場にもいえるが、将来は部分的に板石の舗装などをも導入する必要もあらうかと考えられる。

終りに利用者の駐車場に関する計画であるが、本来は公園南面の府道に面して設定する方針であつたが、用地取得に困難な事情があり、公園敷地の北東隅に計画せざるを得なかつた。

この問題は周辺の交通安全対策からも、より良い解決に今後の努力を必要としている。

史跡公園と住民意識

「調査の概要について」

遺跡を積極的に生活環境へ同化することの意義は、近年、保存と開発の問題において認識されつつあるが、多

数の識者が提唱するこの考えは、その実例が市民側から検討される機会に乏しく、説得力を欠く様である。

筆者はこの問題点に注目して、面積約2 haの本公園が遺跡部分のほぼ完工した段階で、周辺住民の意識調査することを意図した。

すなわち、この公園地に接する小学校の学区が公園4方の人口1万人近い地区であることに注目し、児童保護者の調査から、公園近傍住者と遠方居住者の差異などを検討した。

この調査は、史跡と公園化の認知度、公園化とその機能およびその意義の評価、公園の利用に関する頻度と目的、史跡の保全方向とその程度に関する意識、およびこれと関連する施設導入の希望を質問事項とする。

その結果、70%台の回答率で870標本を得たが、その構成は別表にしめす通りで、保護者の学歴は初等・中等・高等教育別が1:2:2、地区の居住年数は6年以下と7年以上が1:1、百済寺遺跡と住居の距離は0.5 km未満と以上が1:3の比率であつた。

なお、この調査標本を地区全居住者の関連性は、6才から11才までの子供をもつ家庭のみが標本となつたので30才未満や50才以上の戸主をもつ家庭は調査例に乏しい。

調査問題	階層別	A ₁₁	A ₁₂	A ₂₁	A ₂₂	B ₁₁	B ₂₁	B ₂₁	B ₂₂	C ₁₁	C ₁₂	C ₂₁	C ₂₂
史跡指定地 であること	既 知	3	6	6	10	4	12	14	19	3	11	11	17
	未 知	3	2	6	5	4	2	21	11	2	2	16	10
史跡公園化中 であること	既 知	5	7	7	13	6	14	18	24	5	12	15	21
	未 知	1	1	5	2	2	0	17	6	0	1	12	6
史跡公園化の 価値の有無 について	肯 定	3	4	3	6	3	8	11	12	3	9	11	13
	否 定	0	1	0	2	1	2	4	2	0	1	1	2
	不 明	3	3	9	7	4	4	20	16	2	3	15	12
史跡公園化の 効果の有無 について	肯 定	4	5	7	11	5	12	11	14	5	11	18	22
	否 定	0	1	2	1	1	1	3	1	0	1	1	1
	不 明	2	2	3	3	2	1	21	15	0	1	8	4
公園化肯定の 理由	環境改善	(6)		(10)		(14)		(10)		(19)		(14)	
	遊園拡大	(7)		(6)		(10)		(5)		(7)		(10)	
	史跡保全	(6)		(5)		(6)		(4)		(10)		(7)	
史跡に関する 会話の経験	有	3	5	5	8	5	10	10	13	4	10	11	14
	無	3	3	7	7	3	4	25	17	1	3	16	13
利用の量的 頻度につき	毎週以上	1	3	0	2	2	3	2	3	2	3	2	3
	毎月程度	1	2	2	4	2	5	6	6	2	5	6	6
	毎季以下	3	2	6	6	2	3	18	15	1	2	13	14
	不 明	1	1	4	3	2	3	9	6	0	3	6	4
利用の質的 目的につき	散歩休養	2	4	4	6	3	8	14	14	3	7	12	16
	幼児遊戯	1	2	3	3	1	2	6	3	1	3	4	2
	教育教養	2	2	2	3	3	3	5	8	1	3	8	8
	参拝祭礼	0	0	0	1	0	1	1	1	0	0	0	0
	不 明	1	0	3	2	1	0	9	4	0	0	3	1
史跡の私権 制限につき	制限反対	0	0	0	1	0	1	1	1	0	0	0	0
	現制賛成	1	2	4	5	2	6	12	12	3	5	10	14
	制度強化	1	1	1	4	1	3	8	7	1	6	8	7
	不 明	4	5	7	5	5	4	14	10	1	2	9	6
史跡の保存 方法につき	史跡緑地	2	4	8	11	5	9	23	19	4	11	21	22
	児童園化	3	3	3	4	3	4	9	9	1	2	5	4
	放置等	1	1	0	0	0	1	2	1	0	0	1	1
	保存反対	0	0	1	0	0	0	1	1	0	0	0	0
本園への希望施設													
小規模休憩施設		(51)		(48)		(56)		(43)		(66)		(52)	
大規模休憩施設		(29)		(30)		(22)		(25)		(31)		(27)	
展示館説明施設		(0)		(2)		(8)		(1)		(10)		(8)	
植栽・修景施設		(6)		(2)		(5)		(5)		(10)		(4)	
遊戯施設		(37)		(29)		(32)		(25)		(36)		(22)	
運動広場		(24)		(7)		(5)		(15)		(15)		(16)	

表2 百済寺史跡公園に関する住民調査結果
(単純集計)

備考 数値は1/2%を単位とするが()内の数値は階層別での百人当たり回答意見数を示す。
階層別の A, B, C, は学歴上の義務・中等・高等教育経験を示す。
こたこれに附した数字は1桁目 1が住居の公園近傍所在を、2が遠方所在を、2桁目1が短かい居住を、2が長い居住経験を示す。
たとえば、義務教育のみをうけた階層で公園の近傍に短かい居住経験をもつものは870回答の3%に当り、百済寺跡が史跡指定地であることを従来から知っていた者と否とは半々であるが、公園化工事については6人中5人が知り、その価値は2人に1人が、その効果は3人に2人が認めている、という事実等がこの表からよみとれよう。

もしこれを含めば、遺跡に対する認識はこの調査結果より更に低だし、利用実態は子供の遊戯が増大し、将来構想はプレイロット化という主張が比率を高めたのであろう。

しかし、これ等の偏倚は史跡公園の意義の評価につい

て、意義を否定する現在の15%を20%以上とするに足りず、利用目的における子供の遊戯を同じく15%から20%に高めるに足りず、将来の史跡遊園化という主張を25%から30%に増大させるに足りぬと推測される。

したがってこれ等の標本抽出偏倚に関する推測は、こ

の調査結果を、学区全居住者の傾向と考えて危険の大きいことを示唆する。

またこの調査の信頼度であるが、意識調査として重要な認否判断では認否が1:1という事態で変異係数は1.0、また2:1で同係数0.9弱であるから、信頼度95%、精度5%の調査を目的とする場合、前者の必要標本数は1537以上と求められ、後者は約1300で条件が満たされると数理統計学の知識からいい得る。

したがってこの調査においては信頼度95%、精度10%として、調査結果を解析し得ると統計学的にいえるので、以下の解析結果は有効数字を1と考えて大過なものと判断される。

「解析結果について」

調査結果は学歴、居住経験、住居位置12階層より回答総数の200分比で分析した。

質問項別にその結果を説明する。

i 史跡の認知度

公園化以前に遺跡地が史跡として知られていたか、という問題で認知率は58%である。

階層別に見ると高学歴層で60%以上、近傍居住で65%長期居住で70%以上の認知があり、特に居住の長さによる影響が著しい。

なお遺跡の近くに長期居住する17%では認知率が80%をこえ、対照層の2倍に及ぶ。

ii 公園化の既知度

遺跡の公園化が知られているか、の問題で既知度は74%、ほぼ4人中3人に知られる。

階層別では高学歴層が80%程度、近傍居住が90%以上でこの問題には住居の遠近が影響することを示す。

この場合も、遺跡の近くに長期居住する18%では95%近くが公園化を知り、遠くに短期しか居住していない42%は60%台である。

iii 公園化の価値的評価

従来はマツ林の荒地であった遺跡を、国民の税金を費消してまで史跡公園化する価値があるか、について意識を質問した結果、49%は不明を回答し、43%は公園化を肯定した。

したがって、判断を下した回答について見ると約85%が肯定したこととなる。

階層別では低学歴について不明が55%、肯定が40%、中学歴で不明が50%、肯定が40%、高学歴で不明が45%肯定が50%であり、住居の接近は不明に55%から35%、否定と35%から55%という変化を、居住の長短は不明に65%から40%、肯定に30%から50%の変化を招くことを以下と同じ5%括約の概数で知り得た。

このことは史跡認知における居住の長短、公園化の知

見における住居の遠近という、要因単独では影響が不明確で、逆に3者の複合による影響があることを意味する。

3者の複合結果は低学歴層の遠隔短期居住者6%で、その4分の1しか肯定を回答せず、高学歴層の近傍長期居住者約7%では4分の3が肯定し、大きい差異を見せる。

iv 公園化の様能的評価

公園の設置による生活環境の改善がどのように、またどの程度評価されているかの調査で改善の肯定62%、不明31%、否定7%の結果、不明の27%までは公園と関係の低い遠隔地の居住者、である。

階層別では低学歴の若学65%、中学歴の同45%、高学歴の同80%、住居近傍例の肯定80%と不明15%、遠隔例の肯定55%と不明35%、居住短期の肯定55%と不明35%長期の肯定70%と不明25%という概数結果が得られた。

この場合も近傍長期居住で肯定が増大し、不明が減少するのは前記の諸調査結果と合致する。

なおここでは判断の理由について回答をも求めたが、回答者100人当たり平均29の発言があり、環境の緑化からこれを肯定するもの13、幼児の場の設定から肯定するもの7、史跡との接触が容易になったため肯定するもの6これに反し公園化が不完全であるからと否定するもの2従来の荒地の方が遺跡感があると否定するもの1、であった。

これを学歴について分析すると低学歴層は肯定意見20否定意見1、中学歴層は各々22と5、高学歴層は各々32と1であり、近傍居住は各々30と2で高学歴層と近似し遠隔居住は各々25と3という結果になっている。

これ等を通じて、公園化の機能的評価は、まず環境緑地という普通の公園緑地としての意義で理解され、史跡整備という意味ではその3分の1程度の発言しかない。

これは百済寺の史跡が話題になるか否かという質問に対して、その有無が49%と51%、荒地を史跡と知っていたか否かの質問より肯定の回答が低いという史跡に対する理解が未開発である事実とも照合され、問題の認識が、今後は公園の完成と郷土教育の普及から徹底すると期待される。

v 量的な公園利用実態

公園利用度数の回答は、年150回水準が3%、同40回水準が10%、同10水準が23%、同2回水準が43%、不明が21%で、その平均は年15回程度という概数となった。

この概数を階層別に比較すると、学歴層間では全て年15回程度で差異に乏しく、住居の遠近では近傍が年25回程度で遠隔の2倍を上廻り、居住の長短では短期が年10回程度、長期が年20回程度という結果を見せる。

利用の度数は、最頻値によつて、公園近傍の例では年10回水準が約30%を、遠隔居住では年2回水準が約50%

を占めて最多である。

なお度数が年間30回を上廻る例は、近傍居住の低学歴長期居住の4%と高学歴短期居住の3%であり、それが10回を下廻る例は各遠隔短期居住の37%がこれに当る。

また500mを限界として内外の年利用率が30%から10%まで低下する実態を誘致率函数で分析すると、距離の約2.5倍に対して利用率はほぼ0.3倍となるため、函数の変数係数はこの場合およそ1.2となり、これは多数の近隣公園や児童公園にも見られる傾向と合致していた。

vi 質的な公園利用実態

利用の目的を散歩や子供の遊戯というソフトな傾向のものと、史跡見学や子供の教育というハードな傾向のものに大別して分析した。

ソフトなタイプでは散歩47%と遊戯15%で合計62%、ハードなタイプは見学18%と教育6%および参拝2%で合計26%、その他の12%は不明を回答している。

このソフトとハードの目的を各階層で見ると、低中学歴では60%と20%、高学歴では65%と30%で不明5%、特にハードな態度は教育水準と共に増大し、他方、住居の遠近ではハードな態度が25%から30%に増大し、居住の長短では30%から25%へ減少する。

これを重畳させると低中学歴の遠隔短期居住ではハードな利用態度は15%、高学歴の遠隔居住で同じく35%という傾向が、それぞれ概数として得られた。

vii 史跡の保全意識

この問題は、史跡価値の認識という前述の調査と関連させて考えられ、史跡保全は現状で適当であるか否か、更に緩和すべきか強化すべきか、の意識と、保全の将来方向は如何にあるべきか、の意識を調査したものである。

前者に関する回答は、保存否定が2%、現在水準の肯定が38%、保存の強化が24%、不明というものが36%であった。

これを階層別に見ると、低学歴水準では現状30%強、強化15%、不明50%、と不明の回答が高く、中学歴水準では現状35%、強化20%、不明40%と平均に近似し、高学歴水準では現状45%、強化30%、不明25%であるが、住居の遠近と居住の長短では、強化がともに25%で差が見られなかった。

つぎ、保存形態については、史跡公園化が69%、児童遊園化が25%、放置と非保存が各々2%、状況に応じて決定というものが別に2%あった。

これも階層別について見ると、学歴の低高により史跡公園化は60%から80%と増大し、児童遊園化は30%から15%と減少し、また住居の遠近では70%から65%に減少居住の長短でも70%から65%への減少を史跡公園化について、遠近、長短での25%不変を児童公園化について、それぞれ概数で求め得た。

この両者は、特に学歴水準の高低が史跡に対する市民の理解度に影響することを示す。

viii 百済寺公園の施設開発に関する希望

この調査は史跡整備の終った段階における百済寺公園の将来整備に関する資料を目的のひとつとしたが、ここでは意識調査として、主に具体的な施設名をあげて希望の有無を質問することで回答を求めた結果をあげる。

質問項目は、小規模の休憩施設・大規模の休憩施設・遊戯施設・運動施設および駐車施設であり、これ以外に得られた自由回答は、植樹を含む修景と史跡展示施設の希望に集中した。

調査結果を100人当りの希望回答数として示せば、小休憩施設51、大休憩施設27、遊戯施設28、運動施設14、駐車施設4、修景開発5、展示施設5、合計134答である。

これを階層別に見ると、低学歴水準では132答、中学歴水準124答、高学歴水準143答であり、距離の遠近では近傍居住者151答、遠隔者125答であった。

またその内容は学歴に応じて、休憩施設が79、72、84答、遊戯施設が44、40、42答、修景展示施設が4、8、15答となり、高学歴層にこの意識の高いことが特長であり、他方、住居の遠近では、休憩施設が87、73答、遊戯施設が50、40答、修景展示施設が13、8答を生み、この階層別は余り明確な傾向を生じない。

以上の希望施設に関する調査結果を総括すると、周辺地域居住者としてはこの範囲で遠近の差なく、過半が小規模の休憩施設整備を希望し、大規模な休憩施設や展示修景については40%強の希望を回答している。

なお、遊戯運動施設開発の禁示を希望する回答も数例見られた。

考察・要約

百済寺跡公園計画の理念を、ここでは生活的な意義からする多元的な空間の共存に求めるべきである、と指摘した。

その意味で、計画の可否は空間機能の効用に対する利用者の意識を通じてなされる評価が、ひとつの基準となり得る。

この研究は、建設途中にある現時点をとりあげて関係地域居住者の意識調査を実施したのであるが、今後は公園建設の完成時にも、同様の調査を試みる予定である。

調査の結果を調査対象の属性と関連せしめて考察すると、つぎの通りである。

学歴の高低が特に関連するものは、公園利用態度について史跡見学という態度が変化すること、史跡の保全意識について保存の強化や史跡公園化の意識が変化することであり、住居の遠近が特に関連するものは、公園化の

認知と公園利用の頻度の変化であり、居住の長短が特に関連するものは、史跡の認知が変化することである。

つぎに住居の遠近と長短などが同時に関連するものは公園化の機能的評価の変化であり、更に学歴の高低・住居の遠近と長短が同時に関連すると判断されるものとして、公園化の価値的評価が指摘される。

なお、公園導入施設に関する調査の結果に関しては、機能の共存により効用の極大化を意図する立場から、つぎの指摘がなされる。

生活環境の1要素である公園緑地として、百済寺跡公園はそれが数々の園地であるにせよ1利用型として未成年層の利用をもたざるを得ないし、このための開発も不可避である。

この意味で何等かの遊戯施設、たとえば砂場や小広場（芝生地や舗装地）および腰掛など、の設定も考えられるが、これは史跡環境保全の前提の下で計画されねばならない。

生活環境の階層性という当然はらわれるべき考慮において、遊戯運動や静養休憩の場は近隣水準の環境要素であり、史跡展示のそれは広域以上の水準における問題であつて、評価の次元が異なることを想起されねばならない。1) 2) 3)

この意味で、休養資源として代替性のない史跡をもつ百済寺跡の開発は、史跡展示の開発が優位をもつ性質のものであり、他の目的機能はこれの下位に置かれるべきであろう。4)

また、この研究は、生活環境の構成に関与する公園緑地計画の1例として、百済寺史跡の公園化に関し、その計画意図を反映する利用の実態や意識を調査考察した。

この調査は870回答を得たが、分析で得られた結果の主要なものはつぎの通りである。

- i) 史跡の公園化に対する評価については、肯定意見と否定意見の比率が、不明をのぞいて、6答ないし9答に対して1答であること、および理由の発言数が肯定的なもの26と否定的なもの3であること、等から肯定的評価の高いことを結論し得る。
- ii) 公園化の肯定理由は3分の2ないし4分の3が環境の緑化や幼児のプレイロット空間の確保されたことを指摘しており、これは利用目的において散歩遊戯型に対する史跡学習型の比率が2答ないし3答に対して1答であることに裏書きされる。
- iii) 他方、史跡の保全意識に関しては、不明いうものを除いて、保存を否定するものが約30答に1答であるがこれを保存形態として検討すると4答に1答は史跡公園化より児童公園化を主張しており、後者では史跡保全の理解は必ずしも高くない。

iv) 本来、史跡保全の理解は、単に1史跡公園の施工をもつて急激に高まる性質のものではなく、この問題は公園が環境要素として定着した時に判断されねばならない。しかしながら、すでに公園化の事実を知見した階層は史跡の公園化に対する肯定が約80%であり、そうでない階層の約55%に対して著しく高い事実がある。これは高学歴水準の階層が低学歴水準の階層よりもそれか約20%も高い事実とともに、将来の史跡環境整備に国民多数が支持するところを暗示すると考えられる

Summary

This study intends to survey inhabitants' feelings and habitations on Historic Park "Kudaradera old Park,, to check designers' intention.

The survey had 870 answers and its main results are as follows ;

- i) The valuation of historic park construction consists 6 to 9 agreement-replies against 1 objection-reply in its rate, and their reasons' numbers are 26 in agreement and 3 in objection, per 100 answers.
- ii) Most of these reasons appoint only their surrounding conditions' alternation, but not historic parks' meaning ; and most of visiting purposes are occupied with their relaxation.
- iii) On future ways of historic spots' use, it is consisted of 6 to 8 in historic park construction and 2 to 4 in playlot construction.
- iv) Above results is a judge at the midway of first historic park's construction.

In future, i. e. after the perfection of this historic park, it is expected the increase of understanding of historic spots' value ; because, at present, citizens with knowledge of present historic park or with high education, appreciate historic spots' value more than other citizens.

Thus, a survey after the perfection of this historic park, will make clear the educational influences of designing intention of this park.

参考文献

- 1) C. A. Doxiadis : Dynapolis...Ekistics' Principles...1960, Athens
- 2) 近藤公夫：都市緑地に見られる休養実態とそれから結論される都市構造の階層性 1の65（造園雑誌）
- 2) 近藤公夫：自然緑地におけるレクリエーション実態の計量的研究 1965（京大演習林報告）
- 4) 関口鏑太郎・近藤公夫：特別史跡百済寺跡公園計画序言 1965（単行報告者）（42.8.10 受付）